

ヨハネ第二9節 「先を行く」教え」

1A 生きたキリスト

1B 真理

2B 愛

2A 形骸化した教え

1B 初めの愛からの離脱

2B 少しばかりの偽り

3B 腐敗

4B 無感動

5B 自存

3A キリストの教えからの逸脱

1B 肉の努力

2B 靈知

4A キリストにある十全

1B 聖霊による証し

2B キリストにある知識

3B 福音にある力

4B キリストにある希望

本文

ヨハネによる第二の手紙を開いてください。第二の手紙は一章分しかない、短い手紙です。午後に、一節ずつすべてを読みます。今朝は、9 節に注目します。「**だれでも、「先を行って」キリストの教えにとどまらない者は、神を持っていません。その教えにとどまる者こそ、御父も御子も持っています。**」今朝、お話したいのは、ちょっと過激に聞こえますが、「先を行く人の呪い」です。

先を行くという言葉、いつでも魅力的に聞こえます。遅れを取っているということは惨めなこと、恥ずかしいことであり、時代の先を行っているとかわれると、そうでありたいと思います。しかし、このような考えが、教会の中にも入ってくると、教会は死にます。いや、死ぬ以上に毒になります。

それは、キリストの教えにとどまらなくなるからです。ある人から聞きましたが、ある牧師さんが、こんなことを言い始めたそうです。「悔い改めなんていうことを言うから、だめなんだ。今は、薬があるんだよ。」抗うつ剤のことを話しているのですが、鬱の人には、悔い改めではなく、薬を勧めなければいけないということです。これは非常に危険ですね。二つの面で危険です。牧師が、免許を持っている医者ではないのに、薬を勧めるということ。もう一つは、今朝のメッセージ、靈的なことで

す。福音の真理を伝えなければいけない牧師が、どんな理由にせよ、悔い改めを説くのを否定することです。これが、キリストの教えから逸脱することのごく一例です。先を行っているようでいて、実はすべてを放り投げて、キリストの福音ではない異質なものを教えていくことということでもあります。

こういった福音の真理からの逸脱は、問題を指摘するところから始まります。問題はあるのです。それは確かにそのとおりです。けれども、巧妙に、その問題指摘の中で、問題ではないもの、いや絶対に棄ててはいけないもの、保持しなければいけないことを棄てるようにそそのかします。

そしてもう一つ興味深いのは、教えが古臭いといって、先を行かなければいけないと言いながら、実は、古くからある問題をそのまま蒸し返しているだけということです。例えば、エホバの証人。教会の歴史でいろいろな問題があったことを指摘して、私たちこそが真の教会だとします。けれども、そこで教えられているイエスは、被造物のイエスであり、神によって造られた人、神ではないのです。これは、アリウス派として紀元後四世紀にすでに異端として破門になっていたことです。

自分たちの群れの歴史ですが、ヒッピーという十代の若者の間でイエス様を信じる霊的覚醒、リバイバルから始まっています。それで、キリスト教会の世界では、若い世代にいかにか届くか？ということが強い関心事なので、カルバリーチャペルがもてはやされた時期がありました。けれども、若い人々にいかにか教会に来てもらうか？ということ、チャック・スミスは考えていませんでした。真理を求めているのにさ迷ってしまっている、海岸で歩いている彼らの姿を見て、単純に救われてほしいという願いをもって祈り始めた結果なのです。キリストの愛です。

そして、彼らはキリスト教を含めて、既成の体制に反発して生きていましたから、教会文化と相入れないものを持ち込みました。例えば、髪の毛が男性でも長くしているとか、服装がカジュアルすぎるとか、また、音楽が当時は、キリスト教に反発したビートルズのようなフォーク・ギターで弾くようなものとか、そういったものを、今までの教会の人たちが受け入れがたいものを、キリストの愛で受け入れたのです。キリストの福音と愛という、二千年の続き、何も変わらない教えを実践している時に、新鮮な聖霊の働きがあったのです。何か先んじて進みたいと願うなら、いつも変わらない古臭い福音の真理に、実は自分が立っていないことに気づき、悔い改め、初めの行いをする事、へりくだることなのです。

ヨハネが手紙を書いていたのは、紀元後 90 年代と言われます。ですから、主が地上におられた時から 60 年が経っています。60 年が経っているのですから、大体、想像できることは、習慣になっ
てしまっているということです。キリストへの信仰が生き生きとしていたものから、その教えが習慣化して、新鮮味が失われていたと考えられます。そこに、ギリシア哲学のグノーシス主義に影響された偽の教えが教会に入り込んできて、「先に行く」ことを教えていたのです。

1A 生きたキリスト

ヨハネがここで教えている「**キリストの教え**」ではありますが、それは、イエスご自身にある教えであり、真理であります。イエスは、他の宗教の創始者のように、生きていくための教えを垂れたものではありません。ご自身こそが、真理であり、ご自身の中に教えがあることを教えていました。弟子トマスが、イエスの行かれる道はどこかのか尋ねたら、主は答えられました。「ヨハ 14:6 わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。」イエスにこそ道があり、真理があり、いのちがあるのです。そして、パウロも、異教の慣わしの中にいたエペソの人々に、次のように勧めました。「エペ 4:20-21 しかしあなたがたは、キリストをそのように学んだのではありません。ただし、本当にあなたがたがキリストについて聞き、キリストにあって教えられているとすれば、です。真理はイエスにあるのですから。」何か、知的に把握するような法則でなく、イエスという方に、真理があると言っているのです。

1B 真理

この方において、「しかり、アーメン」なのです(Ⅱコリ 1:19 参照)。イエスについては、議論の対象ではなく、ただ、「はい、そのとおりです」と答えるしかないのです。ただ、ひれ伏すしかありません。そこで、ヨハネの第二の手紙は、1 節から 4 節までに「真理」の言葉を四回も使っています。キリストにこそ真理があり、この方とその教えにとどまるのです。

2B 愛

そして、キリストの教えに在るとは、ヨハネは何度となく、互いに愛し合っている中に存在していることを教えていました。第一の手紙で、それは神の命令であり、「わたしが愛したように、互いに愛し合いなさい。」とイエスが言われたように、愛があるところで、初めてそこに、キリストが生きておられることが証しされます。

それでヨハネは、この手紙を真理と愛の二つのことばを使って、教会の婦人に語り始めています。「1:1 長老から、選ばれた婦人とその子どもたちへ。私はあなたがたを本当に愛しています。私だけでなく、真理を知っている人々はみな、愛しています。」

2A 形骸化した教え

しかし、同じヨハネが書き記した黙示録において、キリストにある教えがマンネリ化して、習慣化してしまっているのではないか？と思われる状態を、よみがえりのイエスご自身が明らかにして、叱責していることばが出てきます。アジア、今のトルコ西部にある七つの教会に対して、どうなっているのか、主は一つひとつ明らかにしておられます。

1B 初めの愛からの離脱

エペソの教会は、主の教えを、いろいろな反対や偽りと戦っているうちに、初めの愛を忘れてしま

ったと言われています。「黙 2:4-5a けれども、あなたには責めるべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。だから、どこから落ちたのか思い起こし、悔い改めて初めの行いをしなさい。」正しい教えのために戦っているうちに、愛から離れてしまったと言われています。

2B 少しばかりの偽り

そしてペルガモンにある教会に対しては、こう言われました。「黙 2:14 けれども、あなたには少しばかり責めるべきことがある。あなたのところ、バラムの教えを頑なに守る者たちがいる。バラムはバラクに教えて、偶像に献げたいけにえをイスラエルの子らが食べ、淫らなことを行うように、彼らの前につまずきを置かせた。」ペルガモンでは、殉教者も出ました。アンティパスと言いますが、サタンの座があるところで、信仰を棄てず、血を流しました。しかし、わずかばかりに、偶像礼拝をしてもよい、みだらなことをしてもよいと、異教の慣わしを取り入れても仕方がないとする動きが一部にありました。

3B 腐敗

そしてティアティラにある教会に対しては、イゼベルという女預言者が、教会の奉仕者らを偶像礼拝と淫行の中に引き入れたことについて、この女と教会に対する警告を行っておられます。「黙 2:22 見よ、わたしはこの女を病の床に投げ込む。また、この女と姦淫を行う者たちも、この女の行いを離れて悔い改めないなら、大きな患難の中に投げ込む。」ティアティラは、ペルガモンの少しばかりの妥協ではなく、教会全体がその中に入ってしまったという状態です。この教会は、愛と信仰と奉仕については、以前よりもさらにまさっているとイエス様はほめておられます。それにもかかわらず、教会全体が罪を犯すような状態になっています。

4B 無感動

そして、サルデイスにある教会は、「黙 3:1 生きているとは名ばかりで、実は死んでいる。」という、厳しいイエス様の叱責のことばがあります。怖いですね、生きているという評判はあっても、霊的には無感覚になり、無気力になって死んでいるのです。自分たちは過去に主のすばらしい働きがあって、表向きはそれは続いているように見えますが、実はイエスとの生きた交わりが欠けてしまっている、という問題です。

5B 自存

そしてラオディキアにある教会は、「黙 3:15-16 わたしはあなたの行いを知っている。あなたは冷たくもなく、熱くもない。むしろ、冷たいか熱いかであってほしい。そのように、あなたは生ぬるく、熱くも冷たくもないので、わたしは口からあなたを吐き出す。」自分はお金があるし、生活は安定しているし、特に必要なものはありませんよ、という状態です。とくに問題ありませんとなっていて、神に求めない、神を必要としないとまでなっているのです。

3A キリストの教えからの逸脱

このように、それぞれの教会に、霊的な欠けがあり、問題や挑戦がありました。しかし、それらは、一つ一つ、よみがえられた主であるイエスご自身が、ご自身の教えによって問題を明らかにされ、悔い改めを呼びかけておられます。しかし、偽預言者、偽教師は、そうした問題を取り上げます。それらの問題は問題としてあるのです。そこから、キリストご自身の否定へとそそのかします。

1B 肉の努力

使徒たちの時代には、そのような異端は主に二つありました。一つは、ユダヤ主義です。キリストこそが私たちの救いなのに、ユダヤ人たちこそが救われるとして、異邦人はユダヤ教のおきてを守ることによって救われるとしました。だから、割礼を受けなければ救われないという者たちもいたのです。パウロは、ガラテヤ地方の諸教会にこう書きました。「ガラ 1:8 しかし、私たちであれ天の御使いであれ、もし私たちがあなたがたに宣べ伝えた福音に反することを、福音として宣べ伝えるなら、そのような者はのろわれるべきです。」

「別に、割礼を受けるだけなんですよ？なんで、そのことだけで、呪われているなんて、極端だ。」という反応があるでしょう。もちろん、割礼そのものが呪いをもたらすものではありません。割礼を受けなければ救われないとしているところで、キリストだけでは足りないと教えているからです。それなら、なぜキリストが死ななければいけなかったのでしょうか？私たちの律法の行いによって義と認められるのであれば、どうして十字架につけられなければいけないのでしょうか？キリストが100%の義でなければ、99%であっても、キリストを0%、無にするのです。

私がかつて、一カ月いてしまった異端の教会では、予定論という講義で、「キリストが95%の責任があり、5%は人間の責任だ。」とします。私たちも少し努力しないといけないとして、キリストへの信仰といいながら、行いがいいという問題の隙をついているのです。ヤコブの手紙が取り扱っていましたね。けれども、100%のキリストの義によって私たちは救われ、その結果として、私たちは応答として良い行いをするのです。キリストの義による救い、信仰による救いは、必ず良い行いの実を結ぶのです。

2B 霊知

使徒たちが生きている時にあった、もう一つの大きな異端の流れは、グノーシス主義です。ユダヤ主義とは違って、行いではなく、知識、知っていることを誇りとしていることです。「精神のみが善であり、物質は悪であるというグノーシスの思想の傾向の中にありました。人間の霊、精神、知性は肉体という物体の中に閉じこめられているので、それらを解放しなければならないという考えが横たわっていました。この思想の元では神が人となられたという思想は不可能なことでした。」¹

¹ www.pauline.or.jp%2Fbible%2Feachbook%2Fjohn.php

ユダヤ主義にある律法主義とは正反対です。割礼という肉体における傷が救いに関わるとして、いるのに対して、ギリシアのグノーシス主義は、精神以外、物質や肉体については妨げになっていると考えます。だから、肉体でしていることを否定する禁欲主義にも陥ります。食べること、また結婚することなどを禁じます。

あるいはその反対に、肉体についてのことは肉体に任せていけばよい、精神的なこと、霊的なことだけが大事なのだとしました。ですから、偶像の宮にささげた肉について、それは目に見える物質的なことで、心が主に向いていけばよい、ということになります。肉体の復活は否定します。そして性の乱れも許容します。心が良ければよいとして、肉体でしていることは関係ないからです。いや、肉体によるものを制限、束縛と考えているので、そこから解放されないといけないと考えます。肉体によって神の栄光を現すなんていう考えは考えられないのです。

それで、キリストが肉体を持って来られて、肉体の死において、魂の永遠の救いを果たし、肉体がよみがえたと考えるのが、あってはならないことになります。このようにして、キリストを真っ向から否定しているのです。神であられるのに、肉体を取られたのです。キリスト者は、御霊によって神の子どもになりましたが、今もこの肉体において神のしもべとなり、肉体において神に栄光を帰するのです。そして、今、肉体に対してしていることにしたがって、後の世に復活して、報いを受けるのです。キリストが肉体をもって父のみこころを行なわれたよに、私たちも肉体において、キリストの栄光を現すのです。

4A キリストにある十全

このように、キリストこそが真理であり、道であり、いのちです。これがキリストの教えです。いつも、同じ福音のことばを聞いて、同じキリストの教えを聞いているが、結果、教会がこんな状態だ。もっと新しい教えが必要なのだ、先を行かないといけないということに対して、前提が間違っているのです。同じ福音のことばに対して、私たちの耳が鈍くなっているのです。教会に問題が出てくるのです。キリストの教えに対して、私たちがへりくだって、真剣に取り組んでいないので、その問題が起こっているのです。足りないのは、キリストがあがめられていない、聖なる方とされていないからです。キリストがキリストとして現れる時に、御霊の新鮮な働きを私たちは経験します。

1B 聖霊による証し

私たちは前回、ヨハネ第一 5 章で学びました。キリストを証しするのは、御霊です。「5:6 この方は、水と血によって来られた方、イエス・キリストです。水によるだけではなく、水と血によって来られました。御霊はこのことを証しする方です。御霊は真理だからです。」御霊は、キリストを証しされます。この方が確かに今、生きておられることを聖霊だからこそ、明らかにされます。聖霊を求めましょう、この方に満たされましょう。

2B キリストにある知識

キリスト教会に、あたかもキリストだけでは不十分だという風潮が出てきた時に危険です。パウロは、世の知恵を誇っているコリントの人たちに対して、「キリストのために愚かな者」と呼んでいます（Ⅰコリ 4:10）。彼は、パリサイ派のユダヤ人としても、またギリシアの学問においてもすぐれた、エリートの人でした。しかし、キリストのすばらしさを知った今、これらのものをちりあくとみなしています。コロサイ人への手紙では、「2:3 このキリストのうちに、知恵と知識の宝がすべて隠されています。」と言っているのです。

では、社会について、政治について無関心でいなさいということですか？と聞く人がいるかもしれませんが、いいえ、キリストは、政治においても主です。では、教会は政治の勉強をするのでしょうか？教会によっては、政治の勉強や政治活動を教会の中で行おうとしています。違いますね、キリストだけを宣べ伝えるのです。キリストだけをあがめるから、政治の現場で、遣わされている人々が、また国民として、証しを立てることができるのです。精神医療について、私たちが教会で学ぶのでしょうか？いいえ、キリストから学ぶのです。そうしたら、そういった領域にいる時に、キリストにある知恵を働かせて、証しを立てることができるのです。教会が、知識と知恵の宝がすべて隠されているキリストを高くかかげることによって、かえってすべての生活の領域に、キリストが主であることを証しすることができるのです。

3B 福音にある力

そして、私たちは福音の力を信じています。コリントの町は、異教の慣わしでいっぱいでした。けれども教会は、そういった人々も受け入れなければいけないとして、これらの行いをしている、自らを信者だとしている人々も受け入れていたのです。「Ⅰコリ 6:9-11 あなたがたは知らないのですか。正しくない者は神の国を相続できません。思い違いをしてはいけません。淫らな行いをする者、偶像を拝む者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、盗む者、貪欲な者、酒におぼれる者、そしめる者、奪い取る者はみな、神の国を相続することができません。あなたがたのうちのある人たちは、以前はそのような者でした。しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。」以前は、そのような者でした、とパウロは言っています。つまり、これほどのことをやっていたのに、今はやめている人たちがいたのです。その人は、主の御名と、神の御霊によって、洗われて、聖なる者とされて、義と認められているのです。

福音の力、御霊の力を信じていないと、教会は両極端に陥ります。一つは、律法主義です。こういったことをしている人々を教会が受け入れなくなります。また、そういったことを行っている人々を、人間的に変えていこうとします。そうした極端にから今度は振り子が揺れて、もう一つが放縦になるのです。何でもかんでもかまわない、自由だとなるのです。

どちらも間違いです。キリストがおられるところには、罪人が集まるのです。主は罪人と食事をとられました。そして、キリストがおられるところには、この方に直に触れて、悔い改めるのです。そのままの自分で来て、そのままの自分をキリストが受け入れてくださり、その愛に触れて、その人が自分の罪を捨てます。

4B キリストにある希望

そして、私たちは、キリストのみ希望を置きます。主が戻ってこられることに希望を抱きます。「テトス 2:11-13 実に、すべての人に救いをもたらす神の恵みが現れたのです。その恵みは、私たちが不敬虔とこの世の欲を捨て、今の世にあって、慎み深く、正しく、敬虔に生活し、祝福に満ちた望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるイエス・キリストの、栄光ある現れを待ち望むように教えています。」主の栄光ある現われを待ち望むのです。